

今こそ聞きたい!

決済高度化入門

第6回

小口決済の高度化② モバイル・ペイメントを支える24時間決済



麗澤大学
経済学部 教授
中島 真志

24時間365日化と
表裏一体で進行

小口決済の世界では決済の「リアルタイム化」や「24時間365日化」が急速に進むが、同時並行で進んでいるもう一つの動きが「モバイル・ペイメント」である。これは、携帯電話番号（ケータイ番号）を使った個人間送金のことを指す。従来の銀行間送金では、相手の口座番号を知らなければ送金を行うことはできなかったが、ケータイ番号を口座番号の「代理」として使う仕組みを導入することにより、スマートフォン（スマホ）を使って誰でも簡単に送金ができるようになる。

このサービスを使うために、利用者は、あらかじめ取引銀行に自分の口座番号に対応したケータイ番号を登録しておくことが必要である。この口座番号とケータイ番号との対応関係は、銀行界共通の「中央データベース」で一括管理される。送金を行うときには、①スマホのアプリを開く、②アドレス帳から送金相手のケータイ番号を選ぶ、③送金金額を入力する、④送金ボタンを押すという極めて簡単な操作で行うことができる。また、「さっきのコーヒー代です」とか「チケットの手配ありがとうございました」といったメッセージ付きで送金を行うこともできる。こうしたケータイ番号送金で

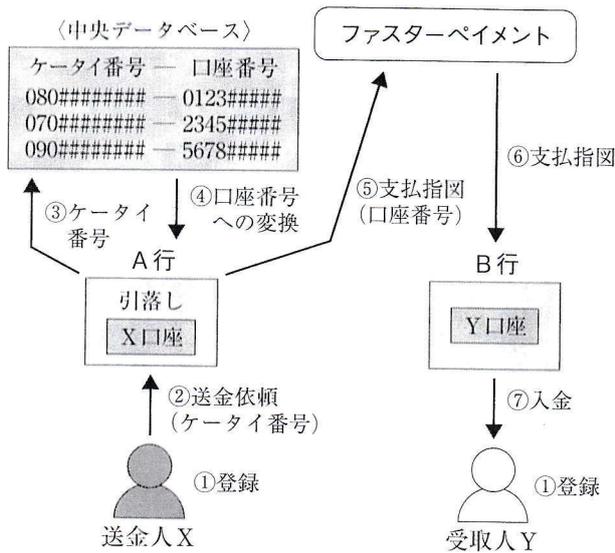
は、24時間365日いつでもスマホで送金を行えることが不可欠であり、それが大きなメリットにもなる。このため、銀行間の資金決済を行う小口決済システムが24時間365日稼働していることがこのサービス導入の大前提となる。

モバイル・ペイメントと決済システムがどのようにリンクしているのかを具体例で見よう。図表は、英国の「ペイエム」というモバイル・ペイメントの例である。送金人Xは、取引銀行A行に対して、受取人Yへの送金指図（ケータイ番号による）を送る。A行がこの送金指図を中央データベースに送ると、データベースでは登録して

ある情報により、ケータイ番号をYの口座番号に一瞬で変換してA行に通知する。ここからは通常の銀行間送金であり、A行では、小口決済システムである「ファスターペイメント」（日本の全銀システムに相当）に対して、支払指図（口座番号による）を送る。ファスターペイメントでは、その支払指図を直ちに受取銀行B行に送信し、B行では、受取人Yの口座に即座に送金額を入金する。Xによる送金の依頼からYの口座への入金まではほんの数秒であり、リアルタイムの送金が実現している。このように、小口決済システムの24時間365日化の流れとモバイル・ペイメントの流れと



〔図表〕 ペイエム（英国）の仕組み



は表裏一体の関係にあり、いわば「ワン・セット」として進められている。

モバイル・ペイメントのメリット

モバイル・ペイメントには、いくつかのメリットがある。

一つ目は、ケータイを使って、24時間いつでも、家族や友人などの知り合いの間（お互いにケータイ番号を知っている間柄）で、手軽にリアルタイムの送金ができるようになることである。

これが実現すると、夫婦、親子、友人、同僚などの間の支払いはいすべてケータイで行えるようになる。そのため、給料日のたびにATMの長い列に並んだりすることは必要なくなるのである。

二つ目は、キャッシュレス化の進展に寄与することである。現在行われているキャッシュレス化の議論では、お店と消費者との間（B2C）のキャッシュレス化ばかりに焦点があつて

いるが、それにも増して重要なのが個人間（P2P）の支払いの場面で、いかにキャッシュレス化を進めていくかである。例えば、数人で会食したケ

ースを考えよう。お店には幹事がカードで支払いをすませたとしても、精算時に割り勘する際はどうしても現金が絡んでしまう。モバイル・ペイメントが実現すれば、ケータイを使ってその場で幹事への

支払いを済ませることができ。しかもつり銭の心配がないので、端数がある割り勘でも問題なく行える。また、24時間のリアルタイム決済なので、全員が支払いの完了をその場で確認することができ。これは、かなり使い勝手がよく、便利なものになるであろう。

三つ目は、モバイル・ペイメントを裏で支えるのは、実は銀行間の決済システムであるということだ。基本的に、この仕組みは「銀行間の送金」そのものである。ただ、その送金を指図するのに「口座番号ではなく、ケータイ番号を使う」だけのことである。このため、信頼性の高い銀行間の資金決済の仕組みをそのまま使うことができる。

さらに言うと、巨額の投資が必要となるような新しい決済システムを構築することも必要ない。すでにある決済システムにデータベース（口座番号とケータイ番号とのひも付け機能）を追加すればよいだけなので、投資費用を抑えることができる。

四つ目は、利用者にとって銀行預金をそのまま使って支払い

ができることである。ノンバンクの送金サービスの場合、支払いを行うためには銀行口座からいったんノンバンクの口座に資金を移しておくこと（事前のチャージ）が必要となるが、モバイル・ペイメントでは銀行口座からそのまま支払いが行われるため、事前にチャージを行ったり、ノンバンク口座の残高を管理したりする必要がない。

五つ目は、銀行界が全体で対応を進めることによって、分断化（フラグメンテーション）を回避できることである。ノンバンクの送金サービスの場合、どうしてもA社のサービスには入っていないが、B社のサービスは使っていないといったかたちでサービスの分断化が発生してしまう。これに対して銀行預金は国民のほぼ全員が口座を有しているため、銀行界が統一したサービスを提供すれば分断化の問題を解決することができる。実際に、普及率の高い北欧諸国では国民の多くが銀行の提供する共通サービスを利用し、誰にも払える状況が実現している。